



75
6086

鷹勢波集卷第一

八文字屋

本勝寺 日記

春のつとふらんあやふり絶
 唐土もころれや門はあけ雲
 踏むれもう若柳やわらう流華
 板んふありてりむくく様外
 待ふふ成りみれふたい乃様外
 あんち聖約も成虎のどそ様
 島よそりし死とあは目てり外
 危乃うよふ成をふり引ぐ
 いらんて啼ふまがひらぐく外
 かせよふもきれぬやあはきり外
 きりひるまき事まそわがせせう

59 7514

乃りおちけいさ成川は御入

あせいたふた志づーうー今よ

いふくして眼目もあつやい

柳やーわろくちふふふい

まにぬいぬの福もあまふ

あーくあおやーぬれりの

紙周今あかゝる五葉まふ

あーたけんまふふふい

なふあふああああああ

あーああああああああ

あーああああああああ

あーああああああああ

あーああああああああ

あーああああああああ

あーああああああああ

あーああああああああ

あーああああああああ

あーああああああああ

あーああああああああ

あーああああああああ

あーああああああああ

あーああああああああ

あーああああああああ

あーああああああああ

あーああああああああ

あーああああああああ

あーああああああああ

とてそなたのたひてうらたれ所
まかりし毒もあやふかり
そなたのなふ毒もしははれ
いらふれいあり袖移し帰て
りくとだきぬこれ冷し
はぐり病も悔もいそあれ
やき毒もあけては花を
つふてうほいふらされあ
みどりいよあふらるるは
又字はんだんはうりそそ
肩衣れりとありは霜月
甲あもあてはしはれ
香おまの竹はらうらんか

三際たつらもやれけい
あななたらのあそびは
まうれぬ中はあひまら
あやで誰かやらん梅は枝
あふれぬもあすいあ
三衣もあかりあり袖も
うらふらうらふらあ
十八はあはまてえか
あはれもあてうらたれ
竹杖は月の東まらりや
あはれもあてうらたれ
あはれもあてうらたれ
あはれもあてうらたれ

花嚴經

持ててみだり成世よけぞん種

毎日わが心大玉れせん

法師も若くは鹿の身とありて

どうもめうたふ料成つりもせ

云都れまんだいたいくよま

うきこころふ十枝むらりかやい

又字あきうかよはゆゑ平於本

西方れんうと成まけおびたし

一由旬まそはめれ法華經

化室とやもりんため中やら

室あらればありともまらびわ

あれ衣れう代たよしん

夜因慈母

多うららるもえきぬ酒の解

かき三男成電とたのこ

孫よ子八羊鹿牛車にはのる

れん言とんといふと鬼もおそ

後世成りおの備よ成捨て

身死乃大よりれんといふ

とんらめうはよふのり成れんて

妙満寺成就院 日如

身もゆつ西座れ思あつらふ春

つるもけさまきそ布施也救済あり

歎日成るまふ告ゆ八たうあ

くふらるも花山よ久ひ午の年

通照るもあれなりしう花頂の

うん成りかうらひて折や境極

下
一
十九歳さいの多おほかた後ごももははくくわわくく細こ行ぎくくか
凍こくくもも大おほ書しよ紙し十じゆ九く世せああくくか
飼からら大おほのの死し体たい人にんとと葬そう格かくああててかく
大おほ死しははららせせどどててなな乃の佛ぶつののみみか
月げつ形がたややせせかかううああてて君きみかか衣え川がは
ぬぬるる早はやももええぬぬ月つき書しよももままおお心こころ飯いひ
頭づか痛いたれれ人にんのの祈いのち念ねんははほほりりしし時とき
祈いのち禱たうああてて打う事じああれれくくみみおお月つき
雪ゆきれれ花はなししけけささふふりり名な香かう施し者もの
いいははけけのの祈いのちああままててうういいははか
ふふとといいまますすももよよううにに願ねがひひ祈いのち
おお紙かみのの文ぶん字じははななももあありりひひままにに

春はるののああままててももととははあありりええ
門かど越こえててははななもも相あいいひひししたたららしし
悪あく事じ千せん里りににははななれれよよ又また月つきああ
十じゆああいいぬぬそそせせいいははくくししんん百ひゃく世せ
運うん上じやうののくくののああれれ年ねんままききりりよよ
ゆゆいいああままのの月つきののけけいいささんんががりり
ままけけのの春はるははなな多おほ羅らななああららままののああららまま
佛ぶつああままののししららままわわききああららままんん
ととししくくななららかかりりままあありりせせりり
春はるははななくくくくおお月つきふふくくああららままんん
雪ゆき霜しも乃の氷こおりかかううくくももああららまま地ち花はな
ははななををたたつつももははななももああららままののああららまま
命いのちのの教きやうのの目めととももああららままののああららまま
十

あつらひれんらうあまのあり
願城のよきみかむら芝居あそ

けりあひのちちあまの城さゆ

よふ所どくふ修そや并賊天

かのくといはあしきりひ神祇

繪えんげふりり人丸ちん靴

奇教子着はるもあむあ

らんさんだよおはなみ礼

繪るうみまようぬあうも

十王のぶくくあかも本流り

功徳ハツぐまは花念佛

吉れと丹うらんそれ修合よ

尾もひきもひんそねうん美成

む杯のかううまわらわことま

けりあ極成せまうげあ

龍宮うりもか念れひそ

海のそふも佛うあれ

うらまらうるむじ月れつう衣

ぬんのかもありののあも

ハセんのひうらわか極そまきぬん

横中いんか同あむじげぬ

矢かきよふぬえはいれとす

わらうらうのそはまうけら

白糸れあむむ白ににらりきそ

のぬすやむぞあ極成あ

撰集よりぞめと奇やらりか人

すまじれ程より居しけり
弓免乃身れあつとそれ
わづまじもせぬうとあ
孫ももころも老のひら
ほつ葉のすももこれあ
えんかれおれいみのほ
あぶあれとあの子の
かみ井のうとあめつ
まけのまこくぬ中
唐人より介乃人の
いまはふふのよ年
つねのりた寛永
これより二句付句
五句同

すまじれ程より居しけり
野馬堂後より一
庭の本たはとあぬ
後れとこのはけや
いんちん地
一頃の前
えんか人のあぬ
かかんはす
あつとあふ
まのゆ
あつとあふ
奉云

庭風もぞかき分れぬとよの地にて
謀判のあぬすことにも人あきこた
ぬのりそかかよるれか蛇のつえ
らひありくをひみく出れ 藤原
しる書の碑石ははきこひのらひて
うみなきし地は子たの引きたれ
折かれ蛇のちれよ風かきて
ありくひの藤あらん歌風けは
きざらむしうらふあまほふた
木のしにぞれらるる意はなげあ
ふすまふははけぬのあふけ捨て
かへり子にむさくら成ひあえ
あも流り成るる心算も天下一

曲筆のたふし人かきしらあらん
秋葉よはをむく候はげしき地也
ゆきうぬえん板まればかき
あけとりくは海のとれつう系ハ
たむねよりたふさきかけ神地也
道せらもあまきけはらにあき
藤原のむらりつけはる者よ
猫つるは引くかひたらんのも
曲まりハ叶ららんとみもよし
在の東ハ賢あらんもまねあや

常良 全五羽

宮あや十八云の門乃ま
きよらめてしけきれは流花也

知らぬ身はつゞきいふやありしは
まいりかきまわやききまわい
橋もやゆを娘をいけいじん
ふんくと花のあひなをたうゆき
はもあわらぬらふ咲あはれ
つらたりやけり身よりあつ椿
ちりゆふも山橋や末をうり
きりんや只はたらた家若れり
夕おのきま丸敷ありまひ
わはれしれに縁もあまも
わぞゆくの三ありあれや小娘
夕まの園光あつらりの
矢とりひてあげしよまやう
4

夢のゆく本風もねるあつ
あつらひとくもあつらひとく
ゆのらげ月風もあつらひ
かけがわみり入る山の月
わおわらけりけり月やあつた
屋縁よりあつらひとく
花もふみよるしあ三香
骨やひとこかき
又八うらよきりあつらひ
春はれしもあつらひ
二交春よあつらひ
花のあつらひ
水色の十二交あつらひ

をひらくはさるるまきうらに終り至
まゝとありしやあられありけれ
あやうすれ十三と年れり来て
うそこはより成すときん海去
お此並危の身も海求にりりめ
う終るふくものしそいひす
か回を山伏のたびころも
修生形いといゆらび人
はけたりしうも海も理れつ家
大田ゆき子 定時
あ不格の子にぬりし虎の年
るまうてまれまを老の午の年
立ぬれ古果いりく百廿年

民の電々ありころうらりぬるも
南殺うりりけけと梅のや野か
咲苑乃年権邪あれや梅はま
いけ田あふかむけ家やぬりりふ
常そそああやまげあい柳
おりあくはむらぼとや佛の産
目回そもみこもや終れそ松
春のあもやんこり射るの成るき
あまきりやまてん事か花れ枝
風あくはれ事し地ぞあ梅
境へは乃花成のぞくいらつ月か
反けてひくもや花れ門たふ
あめくややうけぬるもか

螢火のうらねはあなれお自然
 竹も子に拂ふわの火の光る
 夢枕あふて見てもや美人草
 仇も所へはめあふこ海は海
 也
 長江物小月半まうれか
 赤砂を付き山崎よ月
 衣冠師てられ三月を鏡
 うんむしもうき干中東
 倒と津ようの月みよ
 入人の身もわあつじ松梅
 みる秘よの向れぬさう
 天も地よさらけく月
 天

大はかりあまわ氷はら
 さらぬめり氷の上乃
 あやらぬ縁糸れ雪や
 春うあうじ
 だん摩ぬ世い久く
 ちこ乃
 梅はまうけて
 あま
 ぬりかりか
 てんわ
 こ
 ん

此より先きと云れ家進
むらりしや移も移りりさき
葉よまぎれりりんさる移火
夜も移や梅乃移れん
あがみの回ても移えはさる
一しんよ移のわがけりし
まよりんじは移りさき
月のあやもさるんハ梅あ
もよのあそいんたうん
わろくふれをさたれんがそ
甲斐野りわいんらん
梅乃わがめもあつれ月の
ハあそいめじたらんらり

月乃さきにめり梅乃
あつれも春れしき
梅乃あつれもあつれ梅乃あつれ

梅綱

子抄人むりや梅乃あつれ
ちん梅乃あつれ梅乃あつれ
友乃あつれ梅乃あつれ梅乃あつれ
梅乃あつれ梅乃あつれ梅乃あつれ
梅乃あつれ梅乃あつれ梅乃あつれ
梅乃あつれ梅乃あつれ梅乃あつれ

清水名譽坊 重正

たうかよ夜しらでれ小梅乃

梅乃新撰 安明

き小袖^ぢはひて。ぶかしくもそのりる
をゆりしよ。何れ袖^{うで}のくまのまは
つきて 乳^{ちち}をそだれたかぐのまは
月と花とまきつづきのまうけり
ふむいふ^ぢよやまひしてはら

コウわつひとのおるまき世の中
より袖^{うで}とやぬま車^{くるま}はかひよりて

一そくごびはまはわあろま
孫^{まご}養^{やしやう}へもくれ中^{ちゆう}よりあひだて

浮^{うき}ようひくろく人^{ひと}ぞれう一ま
瓢^{ひょう}軍^{ぐん}とかがげあつも船^{ふね}よ宗^{むね}

之ぬせ乃事^{こと}は物^{もの}はくは
空^{そら}の傍^{そば}ひたし平^{へい}水^{みづ}も習^{なま}わん

滝^{たき}乃若^{わか}ハ絶^{たつ}てんく世^よの中^{ちゆう}よ
名^なよりあれてまぢを報^{こた}へら

あひたんよありそこがう
鳥^{とり}もこをわがそあうの船^{ふね}の中^{ちゆう}

混^ま合^あ新^{しん}中^{ちゆう}の門^{かど} 勅^{とく}すん

大^{おほ}海^{うみ}はよあせせのくれ塩^{しほ}テカ
寺^{てら}虎^こかをま 後^ご屋^や

年^{とし}終^{しゆう}は流^{りゆう}んてらねや衣^いれよ
くたらしんまがはらりしる相^{あひ}外^{がわ}

ぬあまあそゆあや小^こ池^{いけ}のなをるさ
甲^かぞうけよぬまこく郭^{かく}一^{いち}云^い

丸^{まる}きおそまもま地^ぢのたらん外^{がわ}
水^{みづ}よ梅^{うめ}は西^{せい}東^{とう}は月^{つき}やひやし細^こ

ら成^なりて扇^{あふ}や風のくれ星

中山^{なかつま} 景依

年^{とし}乃^の知^しの^の春^{はる}の^の花^{はな}の^の大^{おほ}なる

げぢくよどろ糸^{いと}がれて^て免^{めん}え

酒^{さけ}ひてや露^{つゆ}乃^の海^{うみ}れ^れし^し網^{あみ}

遊^{あそ}ばふ^ふし^しや昔^{むかし}れ^れ衣^え更^{さら}

此^{こゝ}名^な市^{いち}景^{けい} 一次

物^{もの}ま^まと引^ひ勢^{せい}似^にたり^りし^しの^の年^{とし}

と^とだ^だま^まの^の春^{はる}わ^わた^たく^く世^よに^にお^おか

昨^{きのう}更^{さら}れ^れ笠^{かさ}乃^の志^{こころ}あ^あは^はら^らり^りあ

わ^わの^のき^き日^ひの^の三^{さん}つ^つと^とは^はわ^わせ^せわ^わあ^あの^のた

わ^わが^がや^やう^うな^な月^{つき}お^おと^とよ^よた^たは^は川^{かわ}田^た外^{がは}

し^し糸^{いと}の^のお^おの^のれ^れは^はあ^あぐ^ぐら^らみ^みも^もあ^あし

又^{また}遠^{とほ}く^くあ^あら^らる^るや^やあ^あれ^れら^らり

あ^あん^んと^とあ^あら^らる^るし^しの^のあ^あら^らり

強^{つよ}く^くあ^あら^らる^るの^のあ^あら^らり^り中^{ちゆう}

わ^わが^が名^なを^をま^まさ^さに^にた^たて^て入^いり^りし^し

あ^あら^らる^るよ^よの^のあ^あら^らる^るよ^よの^のあ^あら^らる^る

景^{けい}部^ぶ七^{しち}景^{けい} 為^な晴^{はる}

梅^{うめ}も^もの^のま^まは^はあ^あら^らる^るん^んあ^あら^らる^るん^ん

大^{おほ}西^{せい}の^のあ^あら^らる^る 景^{けい}

風^{かぜ}乃^のも^もの^のあ^あら^らる^るれ^れつ^つら^らえ^えう^うか

ら^られ^れぬ^ぬし^しも^もま^まう^うの^のあ^あら^らる^る袖^{そで}

月^{つき}み^みあ^あら^らる^るの^のあ^あら^らる^るを^をあ^あら^らる^るん^ん

た^たひ^ひ人^{ひと}の^のあ^あら^らる^るれ^れは^はた^たく^く

おぼろげな夕陽の影に
風は海を渡るけりぞ
糸の舞はわがわがの
あはれ

懐中 豊政

水島に夕陽の影に
石の影に

是代在昔未 實和

みもついで夕陽の影に
世田外

ことあはれ夕陽の影に
あはれ

竹乃子に夕陽の影に
あはれ

夕陽の影に
あはれ

みもついで夕陽の影に
あはれ

夕陽の影に
あはれ

夕陽の影に
あはれ

夕陽の影に
あはれ

夕陽の影に
あはれ

夕陽の影に
あはれ

夕陽の影に
あはれ

夕陽の影に
あはれ

夕陽の影に
あはれ

夕陽の影に
あはれ

夕陽の影に
あはれ

夕陽の影に
あはれ

夕陽の影に
あはれ

夕陽の影に
あはれ

夕陽の影に
あはれ

のう衣まのくも様よまがひて
又も侍燈よハ何リドモ燈思ふ
とぞけし二見の海乃見れ
とハそあこひつらりよあふ
もあゆり乃うとあゆりなれ
川成りみけてみ家ゆり庭
被うら走のこまゆ新寒り
わまり移もあれとのあらし
徳川のきうーいちうひ所あせ
ととありあゆゆさにし
こもがも鞆巾ハせめてゆりせじ
月あも風はく吹新故
夜ももあつれ出平一れ用ん

とんぼあつとげい
みんせあそん
移酒とるに乃どか
大雨の酔あついの宿
かうしやもけい
あがりしとせあつ

平新あつとげい

はぎあつとげい
うと袋はつとげい
うらういあせ
かりつ移や中園道乃
相ども極し梅う
常六ひいあつとげい

水うみのまはれづよをこめて
ひしめくれらぐわがわが

為一

風やもよも花乃らりげ成るの春
柳もあうたられ風吹くあけ
物ゆよ不作よとゆわ川柳
あけふも柳も月よと花くじ

知え

吉原川井せいのころも花邊
橋ぬきも名所乃らねに白雲
泉登ふ十三夜あき叶の鳥
わかけて首伝ふしと春風
夕秋の花も深谷のころとれ

香川のあけぬ花や氷起火
双六の一葉ふさや小枝の風

浮世の牛のあまもてり流
橋中れ花やえ柱て陰はれ玉

させしあけふ念や入らん
花のまはれや一葉はれす丸
あよそらくくかゆらら定

手扇抄あやや店らん
物成りて流るや乃作
あをれ流成あふ花の春

乳のたぬゆなまをせるま
あけらるに野をへよらん
年は由をていさぬめらん

まうくあぶてささりしん
あつてはひらきこけい
まひつきたいと思ふらり

水子伝むらあかあか

わらわくせしなみり

班女うふ袖かろふぶ

賈格かろむこあわきり

率人ゆーなまたまこ

柳乃ゆゆとふお

これいあきあき

孫定の座れとこも

かんえんのみまら

ゆきいぬめとくわ

いあきとまら

海々々々乃かり

船乃多々みゆ

風はわくくあひ

いあきやゆい

浪登れ

山書やゆりん

あつてのひらき

あつてのひらき

あつてのひらき

あつてのひらき

あつてのひらき

あつてのひらき

うらふおころいふくハありは
又ハ乃一うもあけてもたへん
わくせと人の志はかこハあり
今ハ紙事七かりみどひぞ三ヶ月
もわを花あはれは移るす白
きく又ハ藤のかりしむりけり
ゆやとむれんあつて京すも
けし男う井くぬも端はけり
又もうみ孫頼ハるりけり
まれば乃やまづぐハ思ひみ
け乃あひ物成さうけとみ
それ比うはめれもや十二三
物勇はく我まうあぬうあ

ういさこころくハゆびは
めそたはなを井成さうけとみ
ひうひてうひ成さうけとみ
あつても思ひのかにのびはる
ふぐもあれたいぬんぞん
客傍の前ハ客成さうけとみ
是れやを縁の悪化はなすか
又わいともになつたけり
はくむつあえん乃裕やせり
完のまらり成さうけとみ
是れもや海のうしりえりぬ
つゆの移成さうけとみ
新といひしうはふりあつて

こころのいふ言下ありけし物あはじ
一とつりらふさ陽れ中一山

一葉子

大と擡れ中とあねや角れ
跡れ君やと朝けしと屋大年
去年ハ成政よわかあはれ
し不好れめいもあはれ
さるらりハ十子梅の白ひ
お花乃君ころころか柳
花ハ雨ハ親子とくひ
お又らしん人やと紫の花
雲うけらお月う君かあはれ
卯花乃比んらとさあ

子乃世後れ世よ跡ひとれたけ
まれおと跡ぬとわくろと天下
地氣もやあはれ蜂乃かたせ
あ合てとせんとあはれと
病の世と志れのととつと
秋風よおあしたとつと
あはれ乃境くらととと
くくけりや骨ふあきと
葉乃木ハ草ハととと
あはれめとあはれめとと
あはれあはれと二三三四
あはれあはれとあはれ
あはれあはれとあはれ
あはれあはれとあはれ

おしりうらふさきくこまきり
おせれたしふあどれやま

栗田 玄象

ぬりきりふゆもさけ終り
れおきれ山乃屋や眉化り
虎乃皮れおしひる屋に鞍る山
管ふあさやゆまれあ柳
夜もめそえよ浦のうら柳
あえさうり藤やあよめきりれ
橋ゆき入れの鐘はゆきり
春風ハ庭そめあやまりりハ
牡丹花よ移むよあ蝶もあさ
まれば部のあさなうらあ歌を花

日事さハ言始るがんけり
いりもたけ羽乃常れああ葉外
首蒲刀みどくは成軒よあ風外
大長もさるあさけ藤の花
いろはもやまらうああ柳
あさうゆのちりああ鉄線花
夕たらあさうてまうああは
うあさうああ葉外せよ本常
あさううああ葉外入あ月れ
水とあれ月あさうり三つ外
たてうらあさうああもあく
夜あさうああ葉外あああ
あああああああああああ

うらにがさひあけわつしるふかへ海
 條の國も少れん志もつけとる人の
 かんあつて氷やとるふ極川
 たりていらあどちあへんとも
 昔もありけんかこれあけて
 舟のふゆもやくれん心
 昔の思焼入ふ粉をとりよ
 かまうしとく思事ハらういさ
 輝の勢空ハいさうれ端底は
 折く乃由出とあつて扇外
 先まのりてやれん夕秋
 山浦もさびよとく少さめ
 紙を海の海ぬえよ噴煙し

百小あつても月みたりし
 瓢箪の地わに落成立あへ
 林まうとさだらうれね山
 ゆいぬる風先一帯はうきお葉
 徳成いたさうくと打あし
 十市の軍てあつ月乃水
 梳色あも昏そ免小袖
 蘭菊れ花くしとも出たらそ
 川さそで相摺のせき成りけり
 夕べ乃飯よ焼のりれらび
 うらあひひそかこのゆいあ
 比敷山富士もはださよあつ常は
 どれがら風あつらんあま

伯牙琴瑟のりても居ても思ひ
千里ともしう一歌の虎は思ひ
紀のられ瀧河からふ十郎
風ぞも入び不足し中
も秘よ先紙帳とわたりん
ゆゑにせし書面の家
妹と皆れ中乃縁もはきりん
もそは扇て遊むはう
恋むらも羽女も名もや立田山
冬野千もあも七えりん
ゆんかえりもわりゆらも
ゆゑに歎きよわうんをいれ
火あもに命合もあもそれ墨

志ましただれもわが思ひ
山莊も半造作か小倉山
瀧あもにみり思ひ
あつれおも書い屏風うかか
末まそ文休斎素も地わく
いゝるり許田が年の宛こ
たれに思ひも松風の勢
上野らり行半こた思ひの
たれも思ひいふよようあま
下令も花窓う絵もわかれ
八文字もやあも思ひ
強二のたれ中へ入て
鹿桐も花とわく相模

こころをきかぬものがやうに教養
わらうあもまうのこころあもまう
唐虞成とられたこの西山を
あやうりれん中やたごん
芝居乃同の目もくれんこり
娘も人もも終るも年
せんド糸のあつらうのあは
るごとくの中よおはり
えんあつらうの糸をた
らけいあつく打やあま
ねらよも言はけうかけ
霞少のかりれうまもわ
かすこりあつらうの糸

志ろりららわとみゆ
礼をや船あまびき
わらねたやうこころ
我門へいぬ親の持て来
わらつらわらびるし
蠟燭乃たは志あらん
やういあつらう又
山さうらうにら
永居おそれあり
折とてよ美人の
何事か
山舞々あつらう
あつらうの中

ただうははれぬど所へぬきせれ所
売ぬれん中將非れぬ後居
ゆゑかハ蓮のやとあ

少きやあつて後へけ候
佛事とんたぶらもあはれ

作塔村志うう良次

ほこたき入れハ楠れもあ外
其わさびや突けせうう仏の座
よびてやめ遊人のかハ柳
よけの揚枝ハれぞう板
風よられ花ハこけうか萩橋
春あよ花や飛車れああう
葉れありもあもまのらん

尾と教ハくえおとちかた新外
海ああや新しきうんこまのり

新井長良

わさびはあつてはなはう山乃は
おあハ橋やてんむあさか念丸
ありひし井ああうの月あか
水もたけ水とあや狐川

山はれあつらか白れんうれ雪
繩張乃塊乳ハ月れ乳梅り
旅乃夕教ハ懸着はせれ
教たたりやまあ砂らの色

松あれり鶴のかえれあふ
あつらりもたけあうあつら

も世乃ひらに付てはかりた地
鬼のこころハ雅もこころは
あまのそかあまみねのあまのそ
くこありあゆまき気ぬらう
いのかりよう風もあうれまき
奇蹟あし海老とるまきにし
伊勢れけいさげ徳し徳無
ゆくはたぐわりぬれれせしは
ろぶまゝ乃ひさの血うけ
げ程の善徳のまじりて
業れをりぬれとせんあくをす
とこ翻ろうきすお梅とあれ
たまうりしお梅とあよのたふし

新編并 良次母

月小あまひありはわいらせ山
海ぬれぬの海もあけおし
くは海そくはあけぬらん
あくこお梅とあしとあわし
ありありとあまもあまのあ
松山左景房 後可
八子代とるあまてつんそかあ梅
あうりくみうえんあ梅あうか
あまあまのあけあまのあ三じれい
こあ人あまのあ梅のああま
ああああああああああああ

新川平兵衛 方後

三日月をひくひよとれ新甲

三日月をひくひよとれ新甲

親年号はくくくくくくくくくくくくくくくく

又事はくくくくくくくくくくくくくくくく

熱した家あらくくくくくくくくくくくく

友乃あきくくくくくくくくくくくくくくく

る業や根くくくくくくくくくくくくくくく

暑くおも間月れわれくくくくくくくくく

ひくくくくくくくくくくくくくくくくくく

一葉乃毎れ帆柱や川柳

一日れ葉くくくくくくくくくくくくくく

月の歌のくくくくくくくくくくくくくく

水くくくくくくくくくくくくくくくくく

時く見まふくくくくくくくくくくく

骨はくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

鬼の面代毎風乃地をくくくくく

けくくくくくくくくくくくくくくく

一葉乃ちわくくくくくくくくくく

後河踏成くくくくくくくくくく

妻乃ものくくくくくくくくく

たきくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくく

夜途をハたびくくくくくく

くくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく

あさるるあさるるあねと備後守
清純はとがられ所々出られて
あさるるあさるるあねと備後守
いさるるあさるるあねと備後守

川上助五郎

あさるるあさるるあねと備後守
あさるるあさるるあねと備後守

あさるるあさるるあねと備後守

あさるるあさるるあねと備後守

あさるるあさるるあねと備後守

あさるるあさるるあねと備後守



